

敬語の類型論的対照研究

—— 日本語、英語、中国語を基本モデルとする ——

A Typological Study of Politeness:
Based on Prototypes in Japanese English and Chinese

彭 国 躍

1. 始めに
2. 日、英、中の敬語表現のプロトタイプ
 - 2.1. 日本語の敬語
 - 2.2. 英語のポライトネス
 - 2.3. 中国語の敬辞
3. 類型の抽出
4. 世界の敬語の類型論的分類
5. 終わりに

1. 始めに

世界の諸言語の敬語現象について、70年代に入ってから多くの研究が現れてきた。しかし、その中で別々の枠組みによる各言語の敬語の個別研究が中心で、方法論的にも統合されず、対照研究もまだ限られた範囲内で行われなかった。世界の敬語は、言語ごとに異なるタイプを持っているのか、それとも限られたいくつかのタイプによって類別され得るのか、これらの問題については、解決法どころか、まだ模索が始まったばかりである。

この研究は、これまでの敬語の個別研究の成果を踏まえて、類型論の立場から世界の敬語の類型分析を行うことを目的とする。まず、日本語、英語、中国語の敬語を分析し、それぞれの言語の中で体系化された敬語現象の特徴を記述し、そのプロトタイプの型を抽出する。そして、抽出された三つの類型を基準にし、これまで研究された諸言語の敬語表現に適用し、世界の敬語の類型論的分類を試みる。

2. 日、英、中の敬語表現のプロトタイプ

2.1. 日本語の敬語

日本語の敬語の本質について、これまで人称との関係に基づき文法現象として捉える説（山田孝雄、金田一京助）もあれば、基本的に語彙現象、事物の概念的把握による語構成の問題として捉える説（時枝誠記）もある。そして、上の二つの説を総合して、「敬語は基本的には語彙的事実として考えられる。…同時に文法的事実としての面も持ち、また特に文体的事実としても存在する」（辻村 1992 p30）と主張する説（辻村敏樹）もある。

敬語の体系に関しても、従来様々な議論が行われてきた。それを大まかにまとめると、次のような四つの見方がある。

二分類説（山田孝雄、時枝誠記）、三分類説（吉岡郷甫、湯澤幸吉郎）、四分類説（辻村敏樹）、五分類説（宮地裕）。

そのうち三分類説は定説として長い間学校文法などで広く用いられてきた。以下、「尊敬語」、「謙譲語」、「丁寧語」という三分類説をモデルとして諸説の特徴を概観してみる。

尊敬語 ---- お～になる、れる・られる、いらっしゃる、お（名前）…

謙譲語 ---- お～する、お～いたす、申す、存じる、いただく…

丁寧語 ---- ます、です、でございます、お(箸)…

山田の二分類説は人称との対応関係を中心に、三分類説における謙譲語と丁寧語を第1人称にかかわる「謙称」という一つの類にまとめ、尊敬語にあたる「尊称」と対立させたものである。時枝の二分類説は三分類説における尊敬語と謙譲語を、素材間または話し手と素材の関係を規定するものとして「詞の敬語」にまとめ、丁寧語にあたる「ます、です、でございます」などの敬意の直接表現を「辞の敬語」としてまとめたものである。そして、辻村の四分類説は三分類説において丁寧語とされたものから、一部「お箸、お花」などのような特定の相手を対象とせず、話し手が自分の言葉遣いを上品にし美しくする機能を有する表現を「尊敬語」、「謙譲語」、「丁寧語」と並べて第四の「美化語」として設けたのである。そして、四分類説の中で謙譲語に属する「お～いたす、お～申し上げる、存じる、まいる」などのような一部の表現は、話し手が自分自身の行為ではなく、話題中の人物や物事の行為、作用を表現することを通して聞き手への敬意的配慮を示すような用法が見られる。例えば「だんだん暖かくなってまいりました」。宮地の五分類説はこのような用法を独立させて、新しく「丁寧語」の類を設けたものである。

ここで、日本語の敬語体系に関してこのように様々な捉え方や分類が見られる一方、諸説が扱う言語対象の範囲がそれほど変わらないことに注目する必要がある。敬語現象そのものの存在とその外延の広がりに関して以上の諸説の見解はほぼ一致していることが分かる。諸説の違いは基本的に敬語枠内での組織構造の違いで、どんな表現を敬語の枠に入れるべきか否かに関

しては、これらの諸説の間に一つの共通の認識が保たれていることが窺われる。この共通認識は日本語の敬語を定義付け、体系化する上で極めて重要な意味を持っている。

近年では、日本語の敬語研究の対象が間接発話表現など従来敬語体系に属さない現象にまで広がる傾向が現れている。従来の狭義的な敬語以外で発話を丁寧にするための、様々な表現上の工夫、例えば、命令、依頼行為のために使われた疑問表現、推量表現、許可表現、可能表現、否定表現など一般的に間接発話行為と言われる現象や、「結構な物、つまらない物、ささやかな物」など価値評価につながる表現なども考察の対象として含まれるようになった。

しかし、われわれは果たしてこの傾向から従来の敬語の捉え方を、単に視野が狭かったことによるものだと決め付けることができるだろうか。ここで従来の狭い意味での敬語表現とその体系に入らないその他の丁寧さの効果を持つ表現との関係、機能上の相違を整理してみる。

まず、敬語と間接発話表現について、その異同を考えてみる。敬語と間接発話表現との間に対人的配慮、丁寧さの効果を持っているという点で共通している。しかし、両者の対人的配慮の機能の仕方、方向性においては、重要な相違が認められる。たとえば、例1のように、他人に何かを依頼する場合、失礼にならないように間接性を増す手段（授受、否定、質問、確認などの表現法）を使って1 aから1 bへ切り替え、または「くださる」という敬語要素を入れて1 aから1 cへと切り替えることができる。更に、間接性と敬語化の両方を利用して1 aから1 dへと表現上の調節を行うことも可能である。

1 a. これ貸して。

b. これをちょっと貸してもらえないかね。

c. これをお貸しく下さい。

d. これをちょっとお貸しいただけませんか。

このような、相手に何らかの負担を与えるコンテキストでの発話例だけ見ると、狭義の敬語も間接発話表現も同じ機能を果たしているように見える。次に相手に何らかな利益を与えるコンテキストでの発話例を見てみる。

2 a. どんどん食べて。

b. ?どんどん食べてもらえないかね。

c. どんどん召し上がってください。

d. ?どんどん召し上がっていただけませんか。

2は述部において1とまったく同じタイプの表現形式が使われている。しかし、1と2の間にその発話は相手に利益をもたらすか、負担をかけるかという利害関係における文脈条件が明らかに異なる。1は相手に負担をかける文脈における発話で、2は相手に利益を提供する文脈における発話である。客を招待する場面で、相手に御馳走を勧めることを丁寧に表現しようとするれば、われわれは2 aから敬語が使われた2 cへと切り替えることは可能だが、2 aから間

接発話表現が使われた 2 b と 2 d へのシフトは礼儀的には不適切になる。相手に食べてもらうことが、相手にとって苦痛や負担になるような、例 2 に似たような依頼のコンテキストでなければ、2 b と 2 d の間接発話表現は対人的に丁寧な表現として成立し得ないのである。

2 a から 2 c へのシフトは話し手と聞き手との人間関係及び場面というコンテキスト条件に基づくものである。2 a は親しい間柄や身内の人に対して使われるが、敬語が使われた 2 c は話し手がフォーマルな場面での客や目上の客に対して使われる。しかし、2 b と 2 d の間接発話表現の使用条件はこのようなコンテキスト条件だけでは満たされないのである。

例 1 と例 2 の比較を通して、従来の敬語表現の使用は、発話参与者間の年齢、上下、親疎などの人間関係条件や、フォーマルとインフォーマルなどの場面条件に直結するが、間接発話表現の使用は発話参与者間の利害関係に深くかわかり、発話の意味内容に反映された利益／負担のパラメーターに直接影響されることが分かる。

間接発話表現と従来の敬語は、同じく丁寧さの効果を有しながら、その機能の仕方、方向性及び表現形態が異なり、同一のシステムとして単純に統合できないことが明らかである。

丁寧さの効果を有するもう一つの現象は他者賞賛と自己謙遜の言語行為として使われる価値評価の表現である。対人関係において丁寧に振る舞おうとする場合、普通相手からのプレゼントについて「おいしいケーキ」、「結構な物」などと表現し、自分からの贈り物について「ささやかな物」、「つまらない物」などと表現する。この場合の「おいしい、結構な、ささやかな、つまらない」などの表現は、それぞれ相手と自分に関してある種のプラス・マイナスの価値評価を行っているのである。これらの表現が含まれた発話は価値評価の行為によって丁寧さの効果をもたらされるのである。これらの表現は、発話に丁寧さの効果をもたらすことができるものの、単純に狭義の敬語体系の中に入れるわけにはいかない。それを入れるとしたら、価値的意味を含意する語彙（「すばらしい、立派、上手、だめ、無器用、下手…」）をすべて敬語の枠に入れなければならないことになる。これらの表現は丁寧さの効果を持つてはいるが、敬語として形式化されたものではなく、狭義の敬語体系とは明らかに一線を画するものである。

レビンソン (Levinson 1983) によれば、言語の中で、発話の文脈情報を記号化または文法化する現象はダイクシス (deixis, 直示) と呼ばれる。その中に、発話者の立場の情報にかかわる「人称ダイクシス」、発話の時間情報にかかわる「時のダイクシス」、発話の空間情報にかかわる「場所のダイクシス」、発話の前後文脈の情報にかかわる「談話のダイクシス」、そして発話参与者間の社会的関係の情報にかかわる「社会的ダイクシス」が含まれる。従来の敬語論によって記述されてきた日本語の狭義の敬語は、発話参与者間の社会的関係を記号化した言語の形式体系に属し、一種の社会的ダイクシスとして位置付けることができる。このような捉え方は、日本語の敬語を間接発話表現や価値評価の表現から区別し、敬語を一つの自律的な体系として捉える従来の狭義的な敬語説を支持する立場である。

このような日本語の狭義の敬語について、次のように特徴付けることができる。

- A. 閉じた形式体系：敬語体系は、限られた語彙、形態素及び構文パターンによって構成された言語の形式体系である。
- B. 表現上の拘束性：このような敬語は、表現形式上の約束事であり、発話者は発話のコンテキスト条件によってその記号の使用、不使用を選択することはできるが、発話その場その場の動機付けによって新しい敬語表現を創造的に作ることはできないことになっている。
- C. ダイクシスの表現手法：敬語は上下、親疎などに基づく発話参与者間の社会的関係を発話の意味内容や語彙の概念的意味を通さずに直接記号化する一種の社会的ダイクシスである。

日本語の狭義の敬語はこれらの特徴によって一貫性が保たれ、間接発話表現や価値的評価の表現と区別される。このような敬語現象は、ここで日本語における敬語のプロトタイプとみなし、それを「ダイクシス型敬語」と名付ける。

2.2. 英語のポライトネス

英語のポライトネス (politeness) については、ブラウンとレビンソン (Brown and Levinson 1987) の面子理論やリーチ (Leech 1983) の丁寧さの原理などの先行研究がある。

ブラウンとレビンソンの理論によれば、人間は誰もが自分の尊厳を保つための面子意識を持っている。そして、面子意識には相手に理解してもらい認めてもらいたい積極的面子と相手に邪魔されたくない消極的面子という二つの基本的な側面がある。コミュニケーションの行為は、本質的に相手の面子を脅かす行為 (FTA: face threatening act) である。したがって人々は互いに自分と相手のそれぞれの面子を守るように様々な配慮をしながら、コミュニケーションを行う必要がある。このような配慮に基づいて行われた行為はポライトネスである。そして、ポライトネスには、積極的面子に向けられる積極的ポライトネスと消極的面子に向けられる消極的ポライトネスとがある。二つのポライトネスを守るために各々の発話行為を調節するストラテジーの束が備わっている。積極的ポライトネスは相手に対する理解、興味、賞賛、共感などを示すことにより、相手の積極的面子や欲求を満たすものである。そのストラテジーの束は「仲間であることを示す」、「冗談を言う」、「相手の言うことに同調する」など15のストラテジーによって構成される。一方、相手の領域を侵害しないように相手との距離を開けるための消極的なポライトネスのストラテジーの束には、「間接的に表現する」、「恩義を表明する」、「謝る」など10のストラテジーが含まれる (詳しくはBrown and Levinson 1987を参照)。

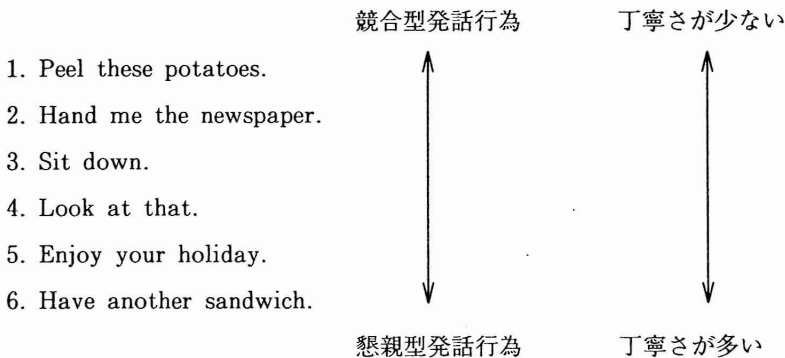
リーチのポライトネス理論は、オースティン、グライス、サールなどの発話行為理論や含意研究の成果を踏まえたものである。彼はまず対人的機能との関係に基づいて発話行為を次の四

つの型に分類し、英語社会において、それぞれの型の発話行為と礼儀正しく振る舞うという社会的目標とのかかわりかたを規定している。

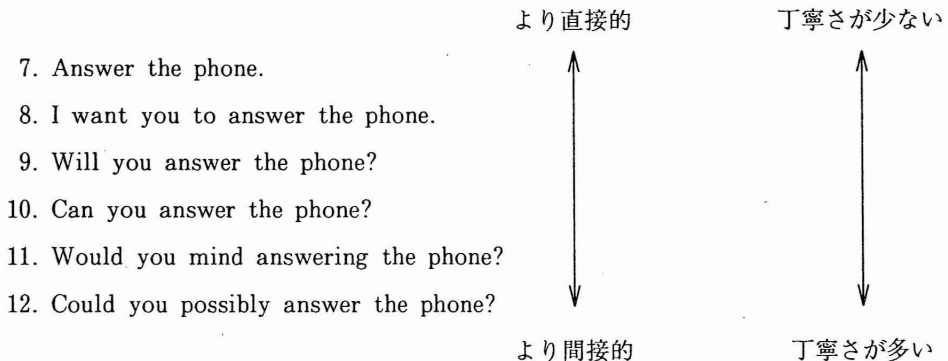
- a 競合型発話行為：命令，反対，要求，懇願…
- b 懇親型発話行為：提供，賞賛，同意，招待…
- c 協調型発話行為：教授，報告，断言…
- d 対立型発話行為：脅迫，非難，懲戒…

リーチによれば，a 競合型発話行為は，対人関係の社会的目標と競合し，無礼を伴う行為である。その無礼さを和らげるために丁寧さの調節が必要である。b 懇親型発話行為は，それ自体が対人関係の社会的目標と一致し，礼儀正しさ，丁寧さに寄与する行為である。c 協調型発話行為は，対人関係の丁寧さとは無関係な行為である。d 対立型発話行為は，人の感情を害することを目的とするので，対人関係の丁寧さの目標と対立する行為である。

リーチは，懇親型発話行為の丁寧さを増したり，競合型発話行為の無礼さを弱めたりすることが英語のポライトネスの動機付けであり，核心であると考えている。例えば，



例1から例6へと進むにつれて，表現上の構文パターンには変化はないが，発話行為の上では競合型から懇親型へと変わっていく。相手への利益が増えることによって発話がだんだん丁寧になっていく。より懇親型に近い発話行為をすることはそれ自体一種の積極的なポライトネスになる。



そして、競合型発話行為が避けられない場合には、丁寧さの調節が必要になる。例7～例12は同じ内容の命令発話行為であるが、例7から例12へと表現の仕方を切り替えていくことにより、発話効力がより間接的になる。間接性が増すことにより競合型発話行為が持つ無礼さが弱められる。

リーチは、競合型と懇親型の二つの発話行為の丁寧さを調節するものとして、「丁寧さの原理」(Politeness Principle) (礼儀にかなう表現は最大限にし、礼儀にかなわない表現は最小限にする)と以下のような下位原則を設けた(詳しくはLeech 1983を参照)。

- a. 気配りの原則：他者に対する負担を最小限にし、利益を最大限にせよ。
- b. 寛大性の原則：自己に対する利益を最小限にし、負担を最大限にせよ。
- c. 是認の原則：他者への非難を最小限にし、賞賛を最大限にせよ。
- d. 謙遜の原則：自己への賞賛を最小限にし、非難を最大限にせよ。
- e. 合意の原則：自己と他者との意見の相違を最小限にし、合意を最大限にせよ。

以上二つの敬語理論は、いずれも主として英語をもとに、英語文化・社会の背景の中で作り出されたものである。このような英語のポライトネス体系に関して、次のように特徴付けることができる。

- A. 発話行為のストラテジー体系：ポライトネスは、話し手が相手に対してどんな発話行為を遂行させ、どのような表現上の工夫をすべきかを方向づける一種のストラテジー体系である。
- B. 発話行為の含意性：発話参与者間の社会的関係の情報は直接記号化されるのではなく、発話された意味内容を通して含意されるのである。
- C. 表現の創造性：発話行為を丁寧に行うために、発話者は、表現形式の制限を受けず、丁寧さに関する原理、原則の条件を満たす表現を創造的に作り出すことが可能である。

このようなポライトネス現象はここで英語社会の敬語のプロトタイプとみなし、「ストラテジー型敬語」と呼ぶことにする。

2.3. 中国語の敬辞

中国語では、従来礼儀正しく振る舞うために、他者のことに関して「令妹(妹さん)、雅情(お気持ち)、貴国(お国)、尊府(お宅)、高隣(お隣さん)、大作(大作)、賢兄(お兄様)、清教(お教え)、明教(お教え)、龍児(お坊っちゃん)、鳳体(お体)、玉体(お体)、千金(お嬢様)、光臨(お出でになる)…」、自己のことに関して「劣弟(私)、拙夫(私の主人)、賤名(私の名前)、下懷(私の気持ち)、小生(私)、愚見(私の意見)、貧家(私の家)、寒舎(私の家)、犬子(私の息子)、蝸居(私の住まい)…」などと表現する敬辞システムがある。このようなシステムの背後に「りっぱな、優雅な、貴い、尊い、高い、大きい、賢い、清い、明るい、龍、鳳凰、玉、金、光」な

どはプラスの価値を有し、「劣る、拙い、賤しい、小さい、愚か、貧しい、寒い、犬、蝸」などはマイナスの価値を有するという中国文化における価値認識が存在する。礼儀正しく振る舞おうとすれば、他者のことにに関して、事実そうでなくても「りっぱな、尊い、明るい、龍の」などのプラスの価値を含意する概念を介して、自分のことにに関して「劣った、賤しい、寒い、犬の」などのマイナス価値を含意する概念を介してメタファー的に表現することが求められる（詳しくは彭 1995a、c、1996bを参照）。このような敬語現象は、紀元前5世紀頃の文献『左伝』などの会話文にすでに現れていた。その後、時代と共に変貌しながら敬辞の内容が豊富になり、近代に至って体系がさらに複雑化した。1949年の革命以後、この敬辞体系は語彙も減少し、場面や文体などにおいて使用範囲が狭まった。このような中国語の伝統的な敬語表現の特徴について、次のようにまとめることができる。

- A. 価値構造の言語的具現：中国においては世界認識に関する価値構造が存在し、敬辞はその価値構造の言語的現れである。
- B. 概念的意味への依存：敬辞の丁寧さの意味は、特定の形態や構文によって、或いはストラテジーによる発話行為の調節によって伝えられるものではなく、語彙の概念的意味に含まれた価値的含意によって伝えられるものである。
- C. メタファーの表現手法：敬辞は、発話参加者の人間関係を共通の価値を含有する概念同士等の等価性、類似性に基づいてメタファー的に表現されるものである。

中国文化における伝統的な世界観、価値観に基づくこのような敬辞表現は、ここで「メタファー型敬語」と呼び、中国語の敬語のプロトタイプとして位置付けることができる。

2. 類型の抽出

以上日、英、中の三つの言語の中からそれぞれの敬語のプロトタイプを抽出した。

日本語——ダイクシス型

英語——ストラテジー型

中国語——メタファー型

この三つのタイプはそれぞれの言語の中で、自明のものとして「敬語」、「politeness」、「敬辞」と認識されている。しかし、このような認識はそれぞれの言語の中で独自の特徴を持つ敬語体系を持っていることを意味するものではあるが、それぞれの言語に他の種類の敬語表現を個別現象としても存在しないことを意味するわけでは決してない。日本語においては、中国語からの借用ではあるが、「貴社、豚児」などのようなメタファーによる敬語表現や「～ていただけませんか」などのようなストラテジーに基づく間接発話表現もあり、英語においては、数は少ないが、「one's highness」のように物理的高さに基づくメタファー型の敬語表現もあれば、「Mr～, please」のように特定の語彙によるダイクシス型の敬語表現も存在する。そして、

中国語においては、「您」のように人間関係を記号化した表現や「能不能～」などの間接発話表現のようにストラテジーに基づく表現も存在する。

しかし、この三つの言語の中で体系化されたものはやはり互いに異なる特徴を持つ三つのタイプである。このような類型を抽出することにより、各言語の中の敬語表現を典型像として浮き彫りにすることができる。Aの言語では体系化されているが、Bの言語では一般的に敬語として意識されないようなことがあるので、他の言語の類型との比較を通して潜在的敬語表現を顕在化することもできる。それぞれの言語の敬語の特徴は、他の言語文化にとって完全に異質なものである、体系化の度合いこそ違うものの、相互に共通に存在する枠組みとして見ることができる。このことは、三つの類型がそれぞれ日、英、中の敬語表現の特色を示すと同時に、普遍的な要素も秘めていることを示唆していると言える。

日、英、中の三つの言語と敬語の三つの類型との関係は、次のようにまとめることができる。太線は各言語におけるプロトタイプである。

言語 類型	日本語	英語	中国語
ダイクシス型	敬語の 形式体系	Mr~, please ...	您, 請...
ストラテジー型	間接発話表現...	ポライトネスの 発話行為体系	間接発話表現...
メタファー型	漢語の敬語 貴社, 豚児...	one's highness ...	敬辞の 概念体系

表 1

3. 世界の敬語の類型論的分類

以下、日本語、英語、中国語から抽出した三つの類型を基本モデルとして、これまで記述研究が行われた世界の諸言語を対象に、敬語の類型的分類を行ってみる。

対象言語は、日本語、英語、中国語の外、アジアでは、朝鮮・韓国語、ベトナム語、ジャワ語、ヒンディー語、チベット語、ペルシア語、ヨーロッパでは、フランス語、ドイツ語、ロシア語、チェコ語、アフリカではハウサ語、そして、クレオールとして、スペイン語系のカリブ海キュラソー島のパピアメント語、フィリピンミンダナオ島のサンボアングのチャパンカノ語、ポルトガル語系のアフリカのベルデクレオール、ギニアクレオール、アンボンクレオール、フランス語系のハイチクレオール、南米ギアナクレオール、インド洋のモリシャスクレオール、英語

系の南米スリナムクレオールなどの、計23の言語である。

以下、ダイクシス型、ストラテジー型、メタファー型の三つのタイプの敬語がそれぞれの言語の中に存在するかどうか、存在するとしたら個別現象として存在するのか、体系として成立するかについて調べる。これまでの研究資料に基づき、すでに記述された敬語現象に三つの敬語タイプを適用すると、表2のようになる。

表2の中で、○はその型の敬語現象が存在することを示し、×はまったく記述されていないことから存在しない可能性が高いことを示し、?は存在する可能性はあるが、不確定であることを示す。*は該当の敬語表現が漢語系語彙であることを示す。

表2の調査結果に基づいて、23の言語の中では次のような傾向が現れている。

まず、ダイクシス型敬語は、個別現象としては、23のすべての言語に存在しているが、体系を確立しているのは、日本語、朝鮮・韓国語、ジャワ語、ヒンディー語、ペルシア語、チベット語、ベトナム語の七つの言語である。七つの言語はいずれもアジア地域の言語であることは興

類 型 言 語		ダイクシス		ストラテジー		メタファー	
		個 別	体 系	個 別	体 系	個 別	体 系
アジア	中 国 語	○	×	○	?	○	○
	日 本 語	○	○	○	?	○*	×
	朝鮮・韓国語	○	○	○	?	○*	×
	ベトナム語	○	○	○	?	○*	×
	ジャワ語	○	○	○	?	○	?
	ヒンディー語	○	○	○	?	○	?
	ペルシア語	○	○	○	?	○	×
	チベット語	○	○	○	?	×	×
ヨーロッパ	英 語	○	×	○	○	○	×
	フランス語	○	×	○	?	×	×
	ドイツ語	○	×	○	?	○	×
	ロシア語	○	×	○	?	×	×
	チェコ語	○	×	○	?	×	×
アフリカ	ハウサ語	○	×	?	?	×	×
クレオール	パピアメント	○	×	?	?	×	×
	チャバカノ	○	×	?	?	×	×
	ベルデ	○	×	?	?	×	×
	ギニア	○	×	?	?	×	×
	アンボン	○	×	?	?	×	×
	ハイチ	○	×	?	?	×	×
	ギアナ	○	×	?	?	×	×
	モリシャス	○	×	?	?	×	×
	スリナム	○	×	?	?	×	×

表 2

味深いことである。

朝鮮・韓国語は特別の形態によって記号化されたダイクシス型の敬語体系を持っている。朝鮮・韓国語の中に素材敬語と対者敬語の区別があり、素材敬語には「尊敬語」(bad-＜受け取る＞)→bad usi-＜お受け取りになる＞)と「謙譲語」(ju-＜やる＞→d uuri-＜差し上げる＞)があり、対者敬語には上称、中称、等称、下称など各レベルにおける待遇法が存在している。その対者敬語は発話者と対者との身分関係によって使い分けられ、日本語の丁寧語と比べてより細分化されている。素材敬語は聞き手の立場に影響されない絶対敬語の要素が強いと言われる(梅田 1977, 1987)。

ジャワ語の中には複雑な敬語法があり、語彙により様々なレベルの敬意度に基づいて「常体」, 「敬体」, 「最上敬体」(内「敬称」, 「謙称」に分けられる)のように使い分けられる現象が存在する。例えば、「訪ねる」という動詞には、待遇上の必要に応じて常体「nekani(teka-i)＜訪問する＞」, 敬体「ndatengi(dateng-i)＜訪問します＞」, 最上敬体の敬称「ngrawuhi(rawuh-i)＜おいでになる＞」, 最上敬体の謙称「njowani(sowan-i)＜うかがう＞」のような複雑な表現がある(崎山 1974)。

ヒンディー語には、尊敬語と謙譲語のような対立があり、人称との対応により動詞の活用形に敬語と非敬語が区分される(町田 1987)。

ペルシア語には、人称代名詞やそれに対応する動詞において尊敬語、謙譲語、丁寧語のような発達した敬語表現が存在する(岡田 1987)。

チベット語特にラサ方言において、体系立ったダイクシス型敬語が非常に発達している。動詞、名詞、形容詞、副詞など、数詞と接続詞を除いたほぼすべての品詞に普通形式と敬語形式の区別が存在する(北村 1974)。

ベトナム語に、家庭呼称や社会呼称などにおいて固有のダイクシス型の敬語現象が観察される(阮 1974)。

そしてストラテジー型敬語は、個別現象としては、ほぼすべての言語に認められる現象ではないと思われるが、これまでの研究では、他の言語に、英語のように敬語ストラテジー体系が確立しているかどうかは不明である。ブラウン・レビンソンとリーチによって記述されたストラテジー型敬語体系は、普遍的な現象として提唱されているが、他の言語への適用はこれから検証されるべき課題であろう。

メタファー型敬語は、個別現象としては、中国語、日本語、朝鮮・韓国語、ベトナム語、ジャワ語、ヒンディー語、ペルシア語、英語、ドイツ語の九つの言語に観察される。このうち、日本語、朝鮮・韓国語、ベトナム語には、中国語敬語による一種の借用現象が見られる。ただし、この借用敬語は、漢語系語彙によるメタファー表現であるという特徴は持っているが、借用先の言語では必ずしも中国語の敬語と同じ表現、同じ用法で使われているわけではない。例えば、

山田(1924)、金田一(1962)によれば、日本語の漢語系敬語には、自分の身内を指すのに使う「愚父、愚母、拙父、拙母」、他人の住居を指すのに使う「貴家、尊家」などの表現がある。これらの表現には「愚～、拙～、貴～、尊～」などが使われた点では中国語の敬辞と同じである。しかし、中国語では、直接自分自身のこと、家族の同輩か目下に言及する場合に「愚弟、愚兄、拙稿、拙見、拙妻」など「愚～、拙～」を使うが、他人の前で自分の父母に言及する場合、「愚、拙」のようなマイナス価値の意味合いが強い表現が使われることはなく、その変わりマイナス意味の薄い「家～」が使われ、「家尊、家父、家母」などと表現する。そして、他人の家に対して「尊～、貴～」を用いて丁寧に表現する場合、中国語では「家」を使うことはない。「家」は「殿、堂、府、家、舎」などの住居形態の中で、一般的でしかもやや価値の低い民家を意味するので、他者の家に対する敬語表現として使うことは失礼になる。他者の家については「尊堂、尊府、貴府」と言わなければならない。この意味で、日本語の漢語系敬語は中国語の敬辞の影響を受けたものの、その漢字の元来の意味よりも表現にパターン化の傾向が見られる。更に、「愚兄、愚弟」という日中共有の謙讓表現に関しても、日本語では、自分の身内を指すが、中国語では自分自身を指すので、指示対象において相違が見られる。そして、「御」に関して、日本語では一般の敬語として使われるが、中国語では皇帝に対してしか使われなかったなどと言った運用面での違いも見られる。

ジャワ語において、常体、敬体、最上敬体の敬意序列語彙の中で、敬体と最上敬体の語彙には、メタファーによる表現が多く観察されている。例えば、「鉄」という語 *wesi* に対して敬体は *tosan* < 固いもの > となる。ヒンディー語において、相手の名前を「あなたの吉祥な名前」、相手の家を「あなたの裕福な家」、自分の家を「貧しい家」などとメタファー的に表現する敬語が存在している。ペルシア語においては、話し手が自分のことを「奴隷」とメタファー的に表現する謙讓表現がある。英語は表現の数はそれほど多くないが、「one's highness」、「one's majesty」などのように、高さや荘厳さという意味を介したメタファー的敬語が皇室用語として使われる。ドイツ語にも古風な言い方ではあるが、「meine Wenigkeit < 私なる卑しい者 = 不肖 >」のようなメタファー的敬語表現がある。

メタファー型敬語を体系として持っているのは、中国語だけである。このようなメタファー型敬語は近代中国語においてもっとも発達していたが、近代から現代にかけて、その使用範囲が徐々に狭まり、この百年の間に衰退の一途を辿っている。

5. 終わりに

世界の敬語の類型分析は、各言語の個別研究の成果に負うところが大きい。個別言語の記述研究のデータが多く蓄積されればされるほど、類型分析の信憑性が高くなる。この研究はこれまで記述されてきた言語範囲内での対照ではあるが、そこに以下のようにいくつかの興味深い

傾向が見えてきた。

アジア系の言語は、メタファー型とダイクシス型のどちらかの体系を持っているのに対して、ヨーロッパ言語はメタファー型とダイクシス型のどちらの体系も持っていないことが一つの注目すべき現象である。

そして、興味深いのは、ヒンディー語やペルシア語が、音韻、文法上の特徴に基づく従来の類型論の研究では、インド・ヨーロッパ言語に帰属するものとされているが、敬語の類型上の特徴に関しては、他のアジア系の言語に類似している現象が観察される。

更に注目すべき点としてあげられるのは、すべてのクレオールが、メタファー型とダイクシス型のどちらの体系をも持たず、ヨーロッパ言語と似たようなパターンを示しているという現象である。クレオールの敬語表現にその祖語であるヨーロッパ言語からの影響が窺われる。

これらの傾向は将来の更なる研究のために示唆を与えることになるのではないと思われる。

参考文献

- Brown, P. and Levinson, S. (1978) 「Universals in Language Usage: Politeness Phenomena.」
In 『Questions and Politeness Formulas.』 Ed. E. N. Goody. Cambridge University Press.
- Brown, P. and Levinson, S. (1987) 『Politeness: Some Universals in Language Usage.』
Cambridge University Press.
- Chao, Yuen Ren 1976 『Aspects of Chinese Sociolinguistics』 Stanford University Press
- 陳 海烈, 徐 英編 1989 『礼貌詞語詞典』 廣州文化出版社
- 陳 松岑 1989 『礼貌語言初探』 商務印書館
- Gu, Yueguo. 1990 「Politeness phenomena in modern Chinese」 『Journal of Pragmatics 14』
p237-257
- 顧 日国 1992 「礼貌、語用与文化」 『外語教学与研究』 4月号北京外国語学院
- 阮 克甚 1974 「ベトナム語の敬語」 『敬語講座 8 世界の敬語』 明治書院 p121-138
- 保川 亜矢子 1984 「チェコ語の敬語」 月刊『言語』 Vol.16, No.8 大修館 p56-61
- 井出 祥子 1983 『日本人とアメリカ人の敬語行動』 南雲堂
- 井出 祥子 1987 「現代の敬語理論——日本と欧米の包括へ」 月刊『言語』 Vol.16 No8 p26-31
- 井出 祥子, 彭 国躍 1994 「敬語表現のタイポロジー」 月刊『言語』 Vol.23 No9 p43-50
- 井出 祥子, 彭 国躍 1996 「Linguistic Politeness in Chinese Japanese and English from A
Socio-Historical Perspective」 『言語学林 1995~1996』 三省堂 p971-983
- カールグレン 1918 『Sound and Symbol in Chinese』 LODON 『支那言語学概論』 岩村 忍, 魚返
善雄訳 1941 東京文求堂
- 川島 淳夫 1974 「ドイツ語の敬語」 『敬語講座 8 世界の敬語』 明治書院 p204-220
- 川本 茂雄 1974 「フランス語の敬語」 『敬語講座 8 世界の敬語』 明治書院 p191-203

- 北村 甫 1974「チベット語の敬語」『敬語講座 8 世界の敬語』明治書院 p69-93
- 木村 英樹 1987「中国語の敬語」月刊『言語』Vol.16,No.8 大修館 p38-43
- 奥水 優 1977「中国語における敬語」『岩波講座 日本語 4 敬語』岩波書店
- Leech,Geoffrey.N 1983『Principles of Pragmatics』Longman Group Limited (和訳『語用論』池上嘉彦、河上誓作訳 1987 紀伊國屋書店)
- Levinson,Stephen.C 1983『Pragmatics』Cambridge University Press (和訳『英語語用論』安井稔、奥田夏子 1993 研究社)
- ネウストブニー,J.V 1974「世界の敬語」『敬語講座 8』明治書院
- 町田 和彦 1987「ヒンディー語の敬語」月刊『言語』Vol.16,No.8 大修館 p62-63
- 松下 周二 1987「ハウサ語の敬語」月刊『言語』Vol.16,No.8 大修館 p68-69
- 三原 幸久 1987「クレオール語の敬語表現」月刊『言語』Vol.16,No.8 大修館 p70-71
- 岡田 恵美子 1987「ベルシア語の敬語」月刊『言語』Vol.16,No.8 大修館 p64-65
- 彭 国躍 1991「明代中国語の敬語とその語用論的方略——『金瓶梅詞話』の会話文分析」『中文研究集刊③』白帝社 p29-52
- 彭 国躍 1992「対人関係の修辞法としてのメタファー」日本言語学会第105回 大会口頭発表
- 彭 国躍 1993「近代中国語の敬語の語用論的考察」『言語研究』日本言語学会 p117-183
- 彭 国躍 1995a「近代中国語敬語体系の理論的枠組み——陰陽世界観に基づく対人関係の認知システム」『富山大学人文学部紀要』第23号 富山大学 p133~166
- 彭 国躍 1995b「『金瓶梅詞話』の年齢質問発話行為と敬語表現——社会言語学のアプローチ」『言語研究』第108号 日本言語学会 p24-45
- 彭 国躍 1995c「メタファー類似性問題の一考察——類似説と創造説の隙間」『日本学報』第14号 大阪大学 p134-158
- 彭 国躍 1995d「近代中国語の敬辞とその被修飾成分との共起関係——親族名称を中心に」『中国語学』第242号 日本中国語学会 p104-114
- 彭 国躍 1996a「近代中国語敬辞の文脈条件の一考察」『富山大学人文学部紀要』第24号 富山大学 p155-169
- 彭 国躍 1996b「近代中国語敬辞の意味ネットワーク」『富山大学人文学部紀要』第25号 富山大学 p211-220
- 宮地 裕 1968「現代敬語の一考察」『国語学』72 国語学会
- 太田 辰夫 1972「中国語における敬語問題」『言語生活』6月号
- 時枝 誠記 1947『国語学原論』岩波書店
- 崎山 理 1974「ジャバ語の敬語」『敬語講座第8巻 世界の敬語』明治書院 p94-120
- 鈴木 一彦、林 巨樹編 1984『研究資料日本文法9 敬語法編』明治書院
- 千野 栄一 1974「スラブ語の敬語」『敬語講座第8巻 世界の敬語』明治書院 p221-233
- 藤堂 明保 1974「中国語の敬語」『敬語講座第8巻 世界の敬語』明治書院 p139-162
- 梅田 博之 1977「朝鮮語における敬語」『日本語 4 敬語』岩波書店 p249-270
- 梅田 博之 1987「韓国語の敬語」月刊『言語』Vol.16,No.8 大修館 p32-37
- 湯沢 幸吉郎 1940『標準語と国語教育』岩波書店
- 山田 孝雄 1924『敬語法の研究』宝文社
- 辻村 敏樹 1977「日本語の敬語の構造と特色」『日本語4 敬語』岩波書店
- 辻村 敏樹 1992『敬語論考』明治書院